

Shakespeare 悲劇における主人公についての一考察

小林 貢

A Study of the heroes of Shakespearean Tragedies

Mitsugu KOBAYASHI

(1996年11月29日受理)

Over the past few decades a considerable number of studies have been made on Shakespearean Tragedies. Actually, however, research on it often failed to grasp what is the occasion for heroes' downfall.

Generally speaking, it is regarded that their downfall is derived from their destinies or their personalities. It goes without saying that they affect their tragic affairs. But let us now look at it from a different angle.

Human beings commonly have the desire that gives them identities, for which the heroes of Shakespearean tragedies conduct themselves consistently. Romeo gave his life for his ideology of courtly love. Occasionally heroes took actions guided by witches' or ghost's or vice-like character's coercive persuasions. For instance, Hamlet avenged himself on Claudius after listening ghost's speech. Besides, Macbeth murdered Duncan by witches' prophesy. In addition, Othello was deceived by Iago's intrigue. Their persuasions fostered illusions in heroes' minds, so they sacrificed their lives after all.

It should be concluded, from what has been said above, that the heroes of Shakespearean tragedies were greatly influenced by their illusions, so they never failed to escape from their deaths.

I

人間以外の動物が持っている個体保存本能という動物本来の行動形式を失った人間が、自らのアイデンティティをも含めた文化を構築することによって本能の代用品を獲得しようとする欲望を無意識に所有していることは否定できないことではなかろうか。そして、その欲望を充足させるために人間は物語の形式を、その実現の手段として用いることとなるのである。それにより人間は自我に対する不安を打ち消すために自分についての立派な物語を恣意的に創り、それを実現しようとすることで自我安定の欲望を満たそうとするのである¹⁾。しかし、その物語は他者との関係性なくしては成り立たないがゆえに、見近な他者の物語の借り物でしかなくなる可能性を秘めているのである。それゆえに人間の欲望充足の物語が仮に実現しようとも、言い換えるならば、他者の自己実現の形式の模倣を実現しようとも現実

には自我の安定には至らないのである²⁾。つまり、本能以外の何かによって自我を安定させようとする欲望は幻想でしかないものであり、人間はその幻想に振り回されるということになるのである。この論文においては絶対的な神によって定められた宇宙的秩序のなかで社会における自分の位置が固定されているはずのシェイクスピアスピア劇の主人公達の自我安定の欲望の幻想がどのように描かれているかについて考察を試みるのである。

II

シェイクスピア劇において、悲劇の主人公達は自らの自我安定の欲望にたいし、どのように対処しているであろうか。この論文においては *Romeo and Juliet* のロミオを中心に、*Othello* のオセロー、*Hamlet* のハムレット、*Macbeth* のマクベスの属性に焦点を当てて考察することとする。はじめに *Romeo*

and Juliet においてロミオは初めて舞台に登場する時にすでに憂いに満ち、やつれているのである。それは見たことはあるが会話を交わしたこともないキャプレット家のロザラインに対して恋こがれ、彼女の存在価値に囚われるものの実現しえない恋により自らのアイデンティティ、言い換えるならば本能の代用物を失っているからなのである。

Ben. At this same ancient feast of Capulet's,
Sups the fair Rosaline, whom thou so lov'st,
With all the admired beauties of Verona:
Go thither; and, with unattainted eye
Compare her face with some that I shall show,
And I will make thee think thy swan a crow.

Rom. When the devout religion of mine eye
Maintains such falsehood, then turn tears of
fires!

And these, who often drown'd could never die,
Transparent heretics, be burnt for liars!

One fairer than my love! the all-seeing sun
Ne'er saw her match since first the world
began. (*Romeo and Juliet*, I, ii, 87-98)³⁾

このようなロミオがジュリエットと出会うことにより自らの存在価値を認められることで失っていた自我確立の欲望に目覚め、二人の幸福な結婚という対立する両家の間においては実現するのが困難である幻想へと行動し始めるのである。このように他者によって一時的にでも自我の安定へと導かれるロミオに対し、*Othello* におけるオセローは絶世の美女を妻に得るという予想も出来ない好運に恵まれた故に、自らが確立していた軍人としての自我安定を失う物語と考えることができるのである⁴⁾。そして、このようなアイデンティティの観点から考えるならば *Macbeth* においては魔女の予言の他には何の大義名分のない謀反を通して自己実現のために自らを国王の位置に定めようとするマクベス⁵⁾が国王としての能力の不足と神の定めた社会秩序を破壊した良心の呵責によって地位、心の安寧、妻そして命さえも失う物語であるとも考えられるのである。一方 *Hamlet* においては、父王の死と母の再婚により自我安定のための家族を失い、王位にも就くこともかなわないハムレットが、亡きハムレット王と思われる亡霊によって⁶⁾自分の父が新王クロードiasによって殺害されたという話を告げられることで、復讐によって生きる意義と自我の安定を見いだそうとする物語であるとも考えられるのである。このようなアイデンティティ確立の欲望の観点からこれらの

悲劇の主人公達の属性を考察したい。

III

自我の欲望に翻弄されるシェイクスピア悲劇における主人公達は行動においてどのような属性をもっているものであろうか。これらの主人公達の行動を観察した時に、まず目に付くのがコミットメントの一貫性が常に彼らの行動にかいま見られることである。当然のことであるが、主人公達は自らの信条を過信し、たとえ間違っているにしても一貫して行動するがゆえに結果として自らの生命を失うような悲劇に達するのである。その理由に関しては運命や性格によると従来は考察されてきたのである。しかし、別の観点からこれらの登場人物を観察してみるならば、悲劇の主人公達のなかには自己や他者のイデオロギーによりマインドコントロールされるが故に「存在すべき自我」に向かい一貫的に、そして直線的に行動するものが存在することが確認されるのである。例えば、ハムレットはハムレットのみに話しかける亡霊に、マクベスは魔女の言葉にマインドコントロールされて、在るべき自分の幻想に対して行動することとなるのである。しかし亡霊や魔女は本当に存在するのであろうか。もし存在するとすれば、それらは何を目的として主人公達に働きかけるのであろうか。彼らを失脚させることが目的なのであろうか。それとも、それらは観念的存在が具象化したものでしかないのではなかろうか⁷⁾。つまり超自然的存在である魔女や亡霊は彼らの欲望が投影された存在ではないだろうか⁸⁾。そう考えるならば、自己の欲望が投影された存在の指示ゆえに主人公達は幻想に対し一貫的に行動し、その方向性を変更することはできないのではなかろうか。

このようなマインドコントロールは自らの欲望の具象化と考えられる超自然的存在の通知によるのみならず、表面的に魅惑的な存在に自ら引きつけられ、そして、その自らの観念によってマインドコントロールを施される現象にも見いだされるのである。例えば *Romeo and Juliet* においてロミオは恋愛の対象であるロザラインそしてジュリエット、すなわちアピアランスによる女性の魅力そのものに偶像崇拜を行うという自らのイデオロギーによって行動をコントロールされていると考えられるのである。それはロミオが自らの切実な愛情欲求から恋に陥るからなのであり、そのことは、ロザラインとは会話も交わしたことがないことから明らかである。しかし、

それは崇拜の対象としての女性を獲得することによって自我を安定できるという幻想の欲求であって、厳密に言うならばロミオの欲求はロザラインやジュリエットのような人格をもった個人に対する関心ではないのである。つまり、ロミオは満たされない自分の欲求を満たすことにばかりに気が向いているのであり、ジュリエットはロミオという存在のナルシズム的な理想を投影するための鏡でしかないのである⁹⁾。それゆえに、ジュリエットの要求している両家の和解を実現しようと意識的には努めながらも、ロミオは結果的に恋人の言うことに耳を傾けないのである。例えば、激情にかられてティボルトを殺すのもプライドを踏みにじられたことに対する復讐の欲求による直線的な行動でしかないものであり、ジュリエットの意向は無視されるのである。

Rom. Alive! in triumph! and Mercutio slain!
 Away to heaven, respective lenity,
 And fire-ey'd fury be my conduct now!

(*Romeo and Juliet*, III, i, 128-130)

この発言と復讐の行動からも明かなようにロミオは自己完結的な存在であり、本質的にジュリエットが求めている存在とはなりえないのである。つまり、ロミオは実際のジュリエットとは違った像を心に描き、その心の中の像を崇拜し、結婚するのである。言い換えるならば、「ジュリエットは、彼女そのものではなく、ロミオの夢を満たすための存在」でしかないのである。それは自我の受容の欲望に焦がれるロミオが恋の対象を初めから求めていて、それを許容する他者ジュリエットに対する自我安定のためのベクトルを変更することは不可能な為なのである。

Rom. I pray thee, chide not; she, whom I
 love now,
 Doth grace for grace and love for love allow;
 The other did not so.

(*Romeo and Juliet*, II, iii, 85-86)

このように自らのイデオロギーと一体化するロミオと対照的なのがマーキューショーであり、彼はロミオの深刻さ、すなわちコミットメントの一貫性に相反する「軽やかさ」を表象しているのである。彼は自らの理想、すなわち自らの幻想に溺れることのない現実主義者であり、女性自体に対し自らの理想を投影することなく、それ故、女性に溺れることもなく、現実を現実として受けとめ冗談を通して生を謳歌しているのである。

Nurse. My fan, Peter.

Mer. Good Peter, to hide her face; for her

fan's the fairer face.

Nurse. God ye good morrow, gentlemen.

Mer. God ye good den, fair gentlewoman.

Nurse. Is it good den?

Mer. 'Tis no less, I tell you; for the bawdy
 hand of the dial is now upon the prick of
 noon. (*Romeo and Juliet*, II, iv, 115-122)

このようにマーキューショーは、現実はあるがままに受け入れるがゆえに自らの幻想やイデオロギーに対し殉死することはないのである¹⁰⁾。ところが、陽気な彼の死は、皮肉なことに自らの観念に固執しているロミオとの関係性から派生するのであり、これはロミオの死への欲望とティボルトやマーキューショーという他者に対する無意識の否定からもたらされるのである。そしてロミオの服毒はジュリエットという自らがマインドコントロールを施した偶像崇拜の対象の喪失に対する殉死でしかないのである。ここで重要であることは、この殉死が「ジュリエットが死んでいる」という誤解に基づくものであり、ここにおいてもロミオは失われた偶像に対し、殉死する自己の行動という幻想の為に命を絶つのである。しかし、この誤解はジュリエットの飲んだ薬についての手紙をロミオが受けられなかった偶然が作用しているし、ジュリエットがロミオの前で目覚めないこともまた偶然なのである。このように自らのイデオロギーによって自らの行動に必然性を見いだすロミオが偶然性によって偶像に対する自らの死を選択するのである。

このようなマインドコントロールとコミットメントの一貫性は *Othello* においても観察されるのである。オセローは自らに失望し、他者を羨望するイアゴーによってキャシオーと妻の関係を疑うようにマインドコントロールされるのである。

Iago. I am glad of it; for now I shall have
 reason

To show the love and duty that I bear you
 With franker spirit; therefore, as I am bound,
 Receive it from me; I speak not yet of proof.
 Look to your wife; observe her well with Cassio
 Wear your eye thus, not jealous nor secure:

(*Othello*, III, iii, 193-198)

このイアゴーの洗脳行為において大きな役割を担っているのがキャシオーであり、特権的なヴェニス市民であるキャシオーにたいする彼らの羨望がデズデモナーとエミリアに投射されるのである¹¹⁾。そのキャシオーを媒介とするイアゴーの説得は現実の歪

曲をおこなっている「破壊的説得」と呼ばれるものであり、一般に破壊的説得には、二つの戦略、つまり、欲求操作と情報操作が伴っているのである¹²⁾。イアゴーの破壊的説得においても、オセローがデズデモーナを殺すことが、唯一の解決策であるかのように欲望操作がなされているし、言うまでもないようにキャシオーとデズデモーナの関係性においても情報操作がなされているのである。さらに、その説得は情緒に訴える言動を利用して耳を傾ける者の般化と弁別の能力をそぐものであり¹³⁾、それによる他者および自己への認識の欠如により、オセローはイアゴーのハンカチのトリックの罠に陥るのである。

Iago. Nay, but be wise; yet we see nothing done;

She may be honest yet. Tell me but this:

Have you not sometimes seen a handkerchief
Spotted with strawberries in your wife's hand?

Oth. I gave her such a one; 'twas my first gift.

Iago. I know not that; but such a handkerchief—

I am sure it was your wife's —did I to-day
See Cassio wipe his beard with.

(*Othello*, III, iii, 433-439)

このデズデモーナの対する疑念に対しオセローは抵抗しながらも一貫的にコミットすることとなるのである。それはオセローがヴェニス人ではないという本質的なコンプレックスに原因があるからで、彼はヴェニス人であるイアゴーとの関係性のなかで自らの存在に対する不安を解消しようとするのである。それがゆえにデズデモーナの疑惑に対し、自らが納得する結論を導き出すまで関わりざるを得ないのである。このオセローの疑惑においても偶然は作用することとなるのである。つまり、デズデモーナはイアゴーの陰謀が熟した時に、運悪くハンカチを落とすのである。それがゆえにオセローは、ロミオの聖なる偶像に対する殉死と対照的に、イアゴーのマインドコントロールにより自分のアイデンティティを支えていた聖なる偶像¹⁴⁾を失ったがゆえに、自己愛を投射して「過度」に愛したデズデモーナ本人を「思慮無く」絞殺せざるを得ないのである。

Oth. Nor set down aught in malice: then must you speak

Of one that lov'd not wisely but too well;

(*Othello*, V, ii, 341-343)

次に、*Hamlet* においてデンマークはノールウェ

イの王子フォーティンブラスが、父の仇を討つ大義名分でデンマークに没収された領土を取り返しに攻めてくる気配のなか、国王を急に失い、国家としての安定を失っている状態にある。それに加えて、ハムレットは父を亡くし、母が叔父と再婚することで、精神的な拠り所を失っているのである。このように、国家的にも、個人的にも混沌としたなかで、亡き父と思われる亡霊¹⁵⁾にハムレットは新王クロードィアスに復讐することをマインドコントロールされるのである¹⁶⁾。

Ghost. So art thou to revenge, when thou shalt hear.

Ham. What?

Ghost. I am thy father's spirit;

.....
..... List, list, O list!

If thou didst ever thy dear father love—

Ham. O God!

Ghost. Revenge his foul and most unnatural murder

Ham. Murder!

Ghost. Murder most foul, as in the best it is;
But this most foul, strange, and unnatural.

Ham. Haste me to know't, that I, with wings as swift
As meditation or the thoughts of love,
May sweep to my revenge.

(*Hamlet*, I, v, 9-30)

そして劇中劇での毒殺場面に対するクロードィアスの反応を根拠とし、ハムレットは復讐に対し、一貫的に関わることとなるのである¹⁷⁾。しかしながら、毒殺の証明は実際にはできていないのであり、亡霊は他の登場人物に目撃されるものの、その発言はハムレットに対してのみコミットすることからも、ハムレットの欲望が投影された幻想の可能性を否定できないのである。このような状況においてハムレットは亡霊の存在を恣意的に利用し、亡霊の発言によって自らの復讐という行動に対する自己正当化を行っているとも考えられるのである。次のハムレットがホレーショとマーセラスに秘密を守ることを誓わせる場面においてハムレットが発言した後からのみ亡霊が発言することは、その可能性を暗示しているのであり、それが仮に彼らにも聞こえたにせよハムレットのマインドコントロールによるとも考えられるのである。

Ham. Never to speak of this that you have
seen,
Swear by my sword.

Ghost. [Beneath.] Swear.

Ham. Hic et ubique? then we'll shift our
ground.

.....
Swear by my sword.

Ghost. [Beneath.] Swear.

(Hamlet, II, i, 152-161)

このような自己正当化は *Macbeth* においても見受けられるのである。マクベスは魔女の「コーダの領主になり、王になる」というマインドコントロールをマクベス夫人共々受けてしまい、その能力が無いにもかかわらず、それに向かって邁進するのである。彼は何度も躊躇するものの神の代行者¹⁸⁾であるダンカン王を殺し、良心の呵責に苛まれるのにもかかわらず、結果的には命を失うまで一貫して自我安定の欲望のために行動するのである。「女から生まれた者にマクベスは負けるはずがない」「バーナムの森がダンシネインの高い丘に進軍しないかぎりマクベスは滅びない」という魔女の予言も *Hamlet* の亡霊と同様にマクベスの欲望が外化したものであると考えられるのであり、その幻想はマクダフに代表される現実によって打破されるのであるがそれでもマクベスは自らの幻想に殉じることで命を失うのである。

Macb. I will not yield
To kiss the ground before young Malcolm's feet
And to baited with the rabble's curse.
Though Birnam wood be come to Dunsinane,
And thou oppos'd, being of no woman born,
Yet I will try the last: before my body
I throw my war-like shield. Lay on, Macduff,
And damn'd be him that first cries, 'Hold,
enough!'

(Macbeth, V, vii, 56-64)

IV

このように、悲劇の主人公達は、マインドコントロールを施す対象により価値を決定されると、その行動様式を変更できない存在であり、他者による承認を通しての無限の模倣欲望の欲求というアイデンティティの危機的状況にある存在なのである。それゆえ一度、行動様式を設定されるとその行動は硬直化し、あくまで一貫的に行動し、死のメタファーと

結びつくこととなるのである。つまり、悲劇の主人公達は自分の幻想に対して一貫して命を賭ける者達なのであり、その幻想は自分の観念から派生したものであるが故に、循環論理的となり、自らの身を減らすこととつながるのである。言い換えるならば、彼らは偶然性の支配する世界において自己、他者によるマインドコントロールにより必然性を見出し、それに固執し、その執着から逃れられないパラノイア的存在なのであり、その自らの行動に対する一貫した統合性ゆえに悲劇に導かれると考えることができるのである¹⁹⁾。

注

- 1) 今村仁司 編『現代思想を読む辞典』, 講談社現代新書, 1988, 613-614 頁.
- 2) 岸田 秀『幻想を語る』, 青土社, 1981, 39 頁.
- 3) Text: William Shakespeare, *Shakespeare Complete Works*, ed. W. J. Craig, (Oxford: Oxford University Press, 1980).
以下の引用においても同書による.
- 4) この過程においてキャッシュー, イアゴー, デズデモナがヴェニス人であり, オセローが黒いムーア人であるという人種の違いは大きな役割を果たしているのである.
Arthur L. Little, Jr., "An essence that's not seen": The Primal Scene of Racism, in *Othello, Shakespeare Quarterly*, 44 (Washington, D.C.: The Folger Shakespeare Library, 1993), p. 304.
- 5) R.A. Foakes, "Images of Death: Ambition in *Macbeth*": *Focos on "Macbeth"* (London: Routledge and Kegan Paul, 1982), p. 26.
- 6) "The dead father indeed was, during four acts more powerful than ever the living one could be,"
Harold Bloom, *Shakespeare Tragedies* (New York: Chelsea House Publishers, 1985), p. 3.
- 7) "Shakespeare, although he makes Joan of Arc a witch, probably believed little in witchcraft; but the King's interest in demonology sent all the court poets to their occult studies, and the outcome is seen in many Jacobean plays and poems and teatyses that supply us with illustrations of the black art."
Humphrey Milford, *Shakespeare's England*,

(London: Oxford University Press, 1916), Vol. II, p. 540.

- 8) 亡霊がハムレットだけに語りかけることや魔女達がマクベスだけに彼自信の未来を告げることは(バンクォーに対して魔女達は子孫が王になることを予言しているのであって、それは彼が望む未来の理想的な幻想であったにしても彼自身のことは王に「ならない」という現状と変わらない状態のみを予言しているのである。また彼が殺されることも予言してはいないのである。)それが彼らの欲望が投影されていることを表象していると考えられるのである。

Hor. My lord, I thind I saw him yesternight.

Ham. Saw who?

Hor. My lord, the king your father.

Ham. The king, my father!

.....

Ham. Bur where was this?

Mar. My lord, upon the platform where we watch'd.

Ham. Did you not speak to it?

Hor. My lord, I did;

But answer made it none;

(Hamlet, I, ii, 189-215)

First Witch. All hail, Macbeth! hail to thee, Thane of Glamis!

Sec. Witch. All hail, Macbeth! hail to thee, Thane of Cawdor!

Third Witch. All hail, Macbeth! that shalt be king hereafter.

(Macbeth, I, iii, 47-50)

First Witch. Lesser than Macbeth, and greater.

Sec. Witch. Not so happy, yet much happier.

Third Witch. Thou shalt get kings, though thou be none:

(Macbeth, I, iii, 65-67)

- 9) ロミオの愛は宮廷恋愛であり、ラカン「宮廷恋愛のイデオロギーの中に明確に見いだされる理想化と崇高化の原理は、基本的にナルシズム的な性格をもつ」ことを認めているのである。Jacques Lacan, *The Ethics of Psychoanalysis*, (London: Routledge, 1992), p. 151.
- 10) イデオロギーにとらわれず、人生を楽しむ姿勢において、マーキュショーの生き方はフォルス

タッフと酷似しているのである。それは「すべての規範の廃絶と価値の転換、そして社会一般の放埒と乱痴気」というカーニヴァルの祝祭における行動原理を内包しており、ロミオの生き方とは対照的である。

James L. Calderwood, *Shakespeare and the Denial of Death*, (Massachusetts: University of Massachusetts Press, 1987), pp. 26-27.

Mircea Eliade, *Cosmos and History: The Myth of Eternal Return*, trans. Willard B. Trask, (Harper Torchbooks, 1959), p. 54.

- 11) このキャショーにたいするオセローとイアゴーの憎悪には去勢コンプレックスが隠べいされていて、それはエディプス・コンプレックスと密接に関係しているのである。

André Green, *The Tragic Effect*, (Cambridge: Cambridge University Press, tr. from *Un oeil en trop*, Paris, 1969), p. 121.

- 12) 欲求操作は、一般的にある企てを、なかなか解決できない問題の解決策であるように見せかけたり、あたかもそれで欲求を満たせるように提示することによって行われる。情報操作は、現実を歪曲して、別の姿に錯覚させるよう、情報を提供または制限することによって行われる。トーマス・W・カイザー&ジャクリーヌ・L・カイザー『あやつられる心』、マインド・コントロール問題研究会 訳、福村出版、1995、107頁。

- 13) Gustave Le Bon, *The Crowd*, 2d ed., (Dunwoody, Georgia: N.S. Berg, 1968), p. 114.

- 14) Gayle Greene, 'This That You Call Love': Sexual and Social Tragedy in *Othello*, in *Shakespeare and Gender A History*, (London: Verso, 1995), p. 52.

- 15) その当時、亡霊については二つの見解があったのである。一つは亡霊は死者が生前の姿であられる善意の存在であるというもので、もう一つは悪魔が魂を地獄に落とすための誘惑の表象であるというものであったのである。

「おれが見た亡霊は悪魔かもしれない」とハムレットは第二幕第二場の結びの第二独白で述べているのであり、それは自らの欲望の可能性を宿しているのである。

- 16) このように亡霊にコントロールされるハムレットは神と彼自身に対する信頼を欠いているのであり、その結果として彼は自分自身の存在を他者の見地から定義しなければならないのであ

る。

- 17) このように目的に対して一貫的にかかわるハムレットのモデルとしてはエリザベス一世に反乱を企てた Earl of Essex であるという説は J. Dover Wilson らによって主張されており、Essex もその晩年においてコミットメントの一貫性から逃れられなかった存在であったことはハムレットと共通しているのである。

“The basis for making a connection between the cultural phenomenon of Essex and the theatrical phenomenon of *Hamlet* is their historical overlap: the final crucial years of Essex’s career (1599–1601) coincide with the dates for *Hamlet*.”

Peter Erickson, *Rewriting Shakespeare, Rewriting Ourselves*, (California: University of California Press, 1991) p. 74.

- 18) 「たとえ神が人々の罪を懲らしめるため異教徒の暴君を送り、人々を治めさせたとしても、人々はその王に服従し、ただ神のとりなしを祈ることだけが許されるだけなのである。」

‘An Homilie Against disobedience and wilfull rebellion: The first part’, *Certain Ser-*

mons or Homilies Appointed to be Read in Churches in the Time of Queen Elizabeth I (1547–1571), A Facsimile Reproduction of the Edition of 1623 by Mary E. Rickey & Thomas B. Btroup (Scholars’ Facsimiles & Reprints, 1968), p. 282.

- 19) このように行動する悲劇の主人公達は自らの企ての行動を統合化しようとする蓄積型の思考をもつパラノイア型の登場人物であり、その一貫性ゆえに極限まで行動するのである。ところがフォルスタッフを代表とする、その時、その時を瞬間的に生きるスキゾフレニー型の登場人物は絶対的なイデオロギーの支配から逃走するのである。そして、食欲や性欲に瞬間的な快楽を見出し、名誉を空気としか考えないのである。それがゆえに、スキゾフレニー型の人物は、自らの欲求に対し、正直にそして自由に生を謳歌するのである。一方、パラノイア型の人物は、中庸と相反する、その過渡な価値観により成功においても失敗においてもメイジャーな存在となりえる存在であり、その追求的な生き方ゆえに「生」に苦しむこととなるのである。